

日本人英語初級学習者のための英語音声指導

津熊 良政

Abstract

This paper reviews some of the special difficulties encountered by Japanese lower secondary school learners in pronouncing English and to suggest some ways in which they can be helped to acquire a natural and fluent ability in practical English communication. In order to speak English intelligibly, and to understand native speakers of English, learners need to become acquainted with the sound system of English, which consists of two main areas, the segmental and the non-segmental. There are several ways of improving the standard of English pronunciation, such as listening to English tapes, CDs, video films and radio programs. Best of all, naturally, is communication with English speaking natives. Unfortunately, these opportunities are rather scarce in Japanese secondary schools, but it is hoped that by using some of the methods described in this paper Japanese learners at the low secondary level will be enabled and encouraged to converse in English with a natural unforced pronunciation.

キーワード：日本人英語学習者、音声指導、音声変化、イントネーション、リズム

．はじめに

文部省（現在は文部科学省）は、1947年から日本の外国語教育について目標を定め、これを中学校・高等学校学習指導要領の外国語科の総合的目標とし、過去半世紀以上にわたって、国内外の新しい情勢を反映させるために、主に実践的なコミュニケーション能力向上を実現させる方

向で改定されてきた。

外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くことや話すことなどの実践的コミュニケーション能力の基礎を養う。

(文部科学省 2003)

また、各言語の目標及び内容等の項目では、具体的な英語学習のための目標が掲げられている。

1. 英語を聞くことに慣れ親しみ、初歩的な英語を聞いて話し手の意向などを理解できるようにする。
2. 英語で話すことに慣れ親しみ、初歩的な英語を用いて自分の考えなどを話すことができるようにする。
3. 英語を読むことに慣れ親しみ、初歩的な英語を読んで書き手の意向などを理解できるようにする。
4. 英語で書くことに慣れ親しみ、初歩的な英語を用いて自分の考えなどを書くことができるようにする。

(MEXT 2003)

文部科学省が4技能(聴く、話す、読む、書く)の発達をこれまで一貫して示してきたが、日本における英語教育は、最近まで依然として文法訳読方式に基づく読み書き中心の受信型教育であった。一方、リスニング・スピーキングは、その必要性の低さから長い間軽視されてきたが、近年になって社会のほとんどあらゆる分野において、もはや実践的な運用能力を伴わない英語は地球化時代にそぐわないものとなってきた。したがって、コミュニケーション能力を涵養するために標準的な英語の発音と英語らしい表現を身につけていることを目標とすることは、英語

学習者の初期段階から導入すべきことであり、理想的には英語学習の早期開始が望まれている。

しかし、早期英語教育の是非については、言語習得臨界期と言語発達・発達心理学などの分野で、議論されているが、少なくとも母語の言語体系が確立する前の年少者たちは、成人の学習者たちに比べて、比較的容易に外国語の音声パターンを習得することができることは、バイリンガル環境やイマージョン教育の現場などで観察されてきている (Lenneberg 1967, Pinker 1984, 小野 1994)。

子供が、大人より音声言語習得能力に長けていることを示すことは、次のBlundenの詩 (抜粋)「A Japanese Evening」の中で如実に描写されている。

...

I repeat - what I said;

He repeats - what he said.

We close at Erecturiku Rightu.

We fasten also on:

The cat, who becomes catsu,

The dog, who proceeds doggu,

Himself, O-Ji-San, Orudu Genturuman,

And all sorts of enigmas.

The girls are quicker, more nimble-throated,

And will reproduce exactly the word, but he lays the law down;

Having re-orientated Fan,

Which they pronounced Fan,

Into Weino,

He instructs them how it ought to be pronounced,

Obediently young Japan reiterates his decision,

...

(Blunden 1940)

．目的

日本人英語学習者が英語音声学習時に経験する様々な困難に焦点をあて、その解決のための方策について考察し、自然でスムーズな実践的英語コミュニケーション能力を習得するための教材を提案する。

．日本の英語教育の現状

英語教育を中学・高校で各３年間、大学でさらに２年以上受けた後であっても、平均的な日本人の全体的な英語力は低い。それには、教育システムの要因と社会文化的要因の両方が存在するものと考えられる。また、それらの要因が改善されてきたテンポも韓国や中国などの国々と比較すると遅い。日本における英語学習の効果を阻害する主なシステムの要因には、１）英語学習開始時期、２）英語学習に配分される合計時間、３）１クラス４０名までのクラスサイズ、４）英語教育をサポートするハードウェア、ソフトウェア、ヒューマンウェアの質と環境、５）有名高校・大学進学のための入学試験システム、などが挙げられる。他方、社会文化的な要因には、１）日常生活における英語使用頻度、２）日英の文化的背景の差、３）卒業後の英語使用環境職場の可能性、などが挙げられる。

結果として、使える英語を身につけることに対する学習意欲や動機を見失いがちにならざるを得ないのが現状である。

．英語音声指導

自然なスピードで話される標準英語を聴き取り、英語らしく発話するためには、まず英語の音声を構成する基本的音韻体系や規則、および発話時に現れる具体的音声特徴を詳しく理解し使いこなせる必要がある。英語の言語音には、大きく分類して子音や母音、連続音中の音声変化やリンキングなどから構成されるセグメンタル（分節的）特徴とストレス、ポーズ、イントネーション、プロミネンス、リズムなどから構成されえるスプラ・セグメンタル（超分節的）特徴がある。

教師は、まずこれら上記の音韻体系や音声特徴が多く の点において日・英語間で異なり、日本人英語学習者は普通、日本語の音声特徴で代用してしまい、その結果、英語でのスムーズなコミュニケーションを阻害してしまう結果につながることを理解しなければならない。その上で、教師は、まず英語音声特徴を正確に理解し使いこなせる能力を自ら身につけていなければならないばかりか、日本人学習者の困難音を予測し、学習者個人個人の発話の診断を客観的に行い、英語との相違点を指摘し、改善策を指導しなければならない重大な役目を担っているのである。

音声指導の基本的プロセスは、学習者に対して、まずモデル発音を繰り返し聴かせることから始まり、英語の特定音素の聴き取りと識別が語レベルや文レベルでできてから、学習者自身に発話させるという順序を守らなければならない。言語音声教育に関する限り、識別できないものは自ら発音できないのが原則であるからである（O'Connor 1980）。モデル発音を繰り返す場合、学習者の聴覚ばかりではなく、視覚や触覚などにもうったえかけられるような可能性のあるあらゆる補助教材を利用して学習者の音声識別・発声を助ける工夫をすることも重要である。具体的には、子音に関する場合は、口腔内の断面図などを示し、声帯振動の有無、調音場所（両唇、唇歯、歯茎、硬口蓋、軟口蓋、声門など）調音

方法（摩擦、破裂、破擦、接近、鼻腔など）の3つの観点から説明すると理解させやすい。一方、母音に関する場合は、口腔内の断面図と合わせて手鏡などを利用し、舌の前後、上下、平唇・円唇、開口度（口の開け具合）でわかりやすく説明することができる。

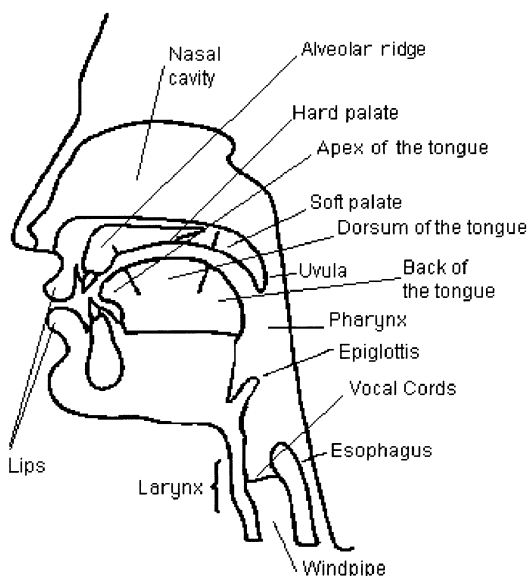


Fig. 1. 音声器官ダイアグラム
(from UNIL Linguistique, Lausanne Univ.)

日本人英語初級学習者は、英語の音声を表記するのに日本語の音標文字であるカタカナを使うことが多いが、日本国内で出版されている英和辞書（電子辞書を含む）には例外なく音声記号が示されている。音声記号は便利ではあるが、特に初級学習者にとっては複雑である上に英語の正字法との混乱を引き起こす原因となるので導入時期については細心の注意を払う必要がある。

English letters do not adequately represent the sound of English. They often confuse the learners rather than help them. (Baker 1977, p.3).

現代英語の発音は、その文字の組み合わせと必ずしも系統的な関係を結んでいないので、多くの場合、カタカナ表記をそのまま使い、ローマ字読みをしてしまう日本人英語初級学習者が、リスニング・スピーキング両面で混乱を起こす結果となることが多い(島岡 1999、2002)。

一般的に言語発達の観点から言えば、人間が生後数年間の間に習得する母語であれば、母語の環境の中で、意味のあることばを無理なく発話することができるようになる。単純に見えることばの生成は、実は脳の中枢からの命令を末端の発音器官にうまく協調させながら伝えるという複雑なデジタル―アナログ変換作業なのである(Hardcastle 1976)。その意味で、人間がことばをしゃべる行為は、よく自転車に乗ることや水泳にたとえられる。どちらの行為も複雑な筋肉の協調性がなければならない。しかし、自転車や水泳の場合、たとえ5年～10年という長い間それらの行為をしていなかったとしても、そのテクニックは消えてしまうものではないが、ことばは絶えず使わないと急激に衰えてしまう点が両者の相違点であると言える。

教師は、この点を理解した上で発音の練習を学習者が厭きないように継続して繰り返し行わなければならないが、教室という環境下で、日本語を母語とする集団の中で英語を敢えてしゃべらなければならないという不自然さを乗り越える1つの方法が歌やゲームなどの導入である。

1999年、小中学校、および高等学校の教育課程の基準を示す「学習指導要領」が改訂され、いわゆる、「ゆとり教育」が実施されてきた影響で、授業時間の配分制限がさらに厳しくなってきた現在、発音指導に多くの時間は費やせないのが現状である。発音指導は、長時間かけて月1回だ

け行うのではなく、短時間であっても長期間継続して毎回行う方が効果的であると考えられている。このように時間的制限が非常に厳しい時期であるからこそ、日本人の英語学習者の困難音や混乱音に焦点を当てる効率的な音声指導法が求められている。

・セグメンタル特徴

5.1. 日本人英語学習者にとって想定される困難音と混乱音

日本人が識別や発音に困難を感じるであろうと予想される音のリストを以下の表にまとめた。日本人英語初級学習者の場合、英語と同じ音が日本語に存在しない場合、日本語において英語の音に一番近い近似音で代替してしまう傾向がある。英語独自の音を矢印の左側に、近似音を矢印の右側に示す。

	英語音 (RP) → 日本語音
子音	/r, l, t→ɾ, f→ɸ, v→b, θ→s, ð→z, d, ɣ→n, j→i, w→u (u), ʒ→dʒ/
母音	/ ɜ : , ə, æ, ʌ→a, ʊ→u (u), i→i, ɔ:→o/
2 重母音	/ eɪ→e (e:), əʊ→o (ɔ:, o:)/
3 重母音	/ aʊə→awa (:), əʊə→oa (:)/

Fig. 2. 日本人英語学習者にとっての英語困難音

O'Connor (1980)は、英語初級学習者の音声指導を考える場合、セグメンタル分野においては、まず、子音から導入するほうが学習プロセスとして合理的であることを主張している。母音導入前に子音を導入すべき理由として、1) 英語の意味の理解に関しては、子音の貢献度は母音より圧倒的に大きいことと、2) 子音の方が舌や唇などの音声器官の場所、および肺からの呼気の流れを止めたり狭めたりする方法を示すことによって発音方法を比較的説明しやすい、ことが挙げられている。

日本人英語学習者にとっての音声上の問題点は、完全に新しい音である困難音と同時に、日本語の音に似た混乱音でもある。例えば、/f/や/v/は困難音であるが、英語では2種類の明確な音素である/l/や/r/は、日本語では両方ともラ行子音として受け止められる混乱音である。教師は、ターゲット言語である英語の音声システムはもちろんであるが、母語である日本語のシステムについても熟知しておくことにより、困難音や混乱音の予測ができるようになる。

困難音や混乱音の練習の際には、単に2種類の音素の違いを機械的に比較対照するのではなく、その1つの音素が違うことによって意味の違いを生む「ミニマル・ペア」を用いることにより、音声記号を使わなくとも、例えば、sheepの/i:/、shipの/i/などと明確に識別させることができる。初級学習者用のミニマル・ペアは、すべての音素の比較対照を可能にするほど豊富に存在するとは言えないが、日本人にとっての混乱音識別のためのミニマル・ペアには、次のようなものが考えられる：

日本人にとっての混乱音	ミニマル・ペア
/l/-r/-r/	lice-rice-ライス
/ŋ/-n/-s/	King-kin-キン
/f/-Φ/	free-フリー
/v/-b/	vest-best
/θ/-s/	thin-sin
/ð/-z/	then-Zen
/j/-i/	year-ear
/w/-ʍ/	wood-ウッド

Fig. 3. 日本人にとっての混乱音とミニマル・ペアの例

特定の種類の困難音・混乱音が日本人学習者に予測されるのは、このような音が日本語では意味の区別に貢献していないからである。換言する

と、コミュニケーション能力の基礎となる意味内容を直接大きく左右するような重要な音声部分が日本人学習者には未修のままで英語学習が進行し、やがて大学に至るまで適切な音声指導を受けずに、内容だけは中・上級英語を学習することになる。したがって、外国語として英語を学習している日本語母語話者にとって、初期の段階であるからこそ、まずこれらの困難音・混乱音に焦点を定めてリスニング・スピーキングの繰り返し練習をすることが、英語らしい音声体系を把握させ、その上に高い内容の英語を積み重ねていくことによって、最終的に「使える英語」につながる一番の近道であると考えられる。特に年少者には、歌やゲームを通じて、楽しく異言語の言語音声システムに慣れさせることをここで提案したい。

5.2. 子音

IPAでは子音を分類するのに、1) 調音場所、2) 調音方法、3) 声帯振動の有無という3つの要素で各音素の特定をしている。具体的には、1) の調音場所には、両唇、唇歯、歯(間)、歯茎、硬口蓋歯茎、歯茎硬口蓋、硬口蓋、軟口蓋、口蓋垂、声門等があり、2) の調音方法には、破裂、摩擦、破擦、鼻音、側面、半母音、接近等があり、3) の声帯振動には、単純に声帯振動有り、声帯振動なしの2種類がある。

英語初級学習者に上記の要素のうち、3) の声帯振動の有無をわかりやすく示す方法としてよく使われるのが、喉に指をあてるものがある。この方法は、単純であるが、やり方さえ間違わなければ非常に効果的である。また、破裂音の氣息部分を十分に出させるために、ティッシュペーパーを口の前にぶら下げて、例えば「pear/ bear」の氣息の有無、また、「pear/ ペア」の氣息量の比較対照をすることができる。英語の氣息部分(正確には、英語のb対pの場合、音声学的には、無氣息音の[p]対氣息音の[pʰ])に分類される。同様に、d対tの場合は、[t]対[tʰ]、g対kの場合には、

[k]対[k^h]となり、弁別の指標は、閉鎖音の破裂と声帯振動開始の時間的關係、すなわち、Voice Onset Timeである)の量は日本語と比較して以外に大きく(Lisker & Abramson 1964, 1970) しかも、氣息と無氣息音の知覚上の識別はカテゴリー的知覚判断であるので、常に日本語以上の一定の氣息を出すことが求められる。

	Bi-labial	Labio-dental	Dental	Alve-olar	Retro-flex	Palato-alveolar	Alveo-palatal	Hard-palate	Soft-palate	Uvula	Glottal
Plosive	p b			t d				c ɟ	k g		ʔ
Fricative	ɸ	f v	θ ð	s z		ʃ ʒ	ç ʝ				h
Affricate				ts dz		tʃ dʒ	tɕ dʑ	ç			
Nasal	m	ɱ		n				ɲ	ŋ	ɴ	
Lateral				l							
Flap				ɾ							
Semivowel	w				ɻ			j			

Fig. 4. IPA による英語と日本語の子音比較

(英語の子音は斜体で、日本語の子音は網掛で示されている: /ɸ/「ふ」/c/「き」/ɟ/「ぎ」/p/「に」/ɾ/「ら行」/ɸ/「し」/ɱ/「じ」/tɕ/「ち」/dʑ/「ぢ」/ç/「ひ」/ɲ/「ん」)

日本人英語学習者にとって、日本語にまったく存在しない音は日本語に存在する近似音で受け止められやすいので、例えば、/r, l/→/ɾ/, /f/→/ɸ/, /v/→/b/, /θ/→/s/, /ð/→/z/等のような置き換えが起こる。したがって、学習者にとってこのような困難音を含む既習の語や文を用いて識別練習を十分に行うことが、この置き換えを防ぐ第1歩である。音の識別が完了した時点で、発音練習に移るが、比較的長い文章やパッセージを読ませる場合、連続音声中の音変化、ストレス、弱化、プロミネンス、イントネーション等のスプラ・セグメンタル特徴という高次の困難が待ち受けていることを忘れてはいけない。

5.3. 母音

母音を正確に発音するには、主に舌、唇、顎の動きが決め手となる。また、英語では母音の音長も重要な弁別的特徴となる。英語の母音のレ

パートリーは、日本語よりも圧倒的に多いので、識別においても発音においても最も混乱が起こりやすい部分でもあるので、十分な時間をかけて繰り返し練習を行いたい。

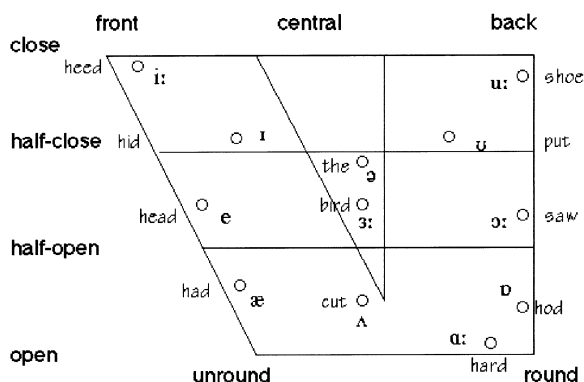


Fig. 5. 英国容認発音 (RP) の12種類の母音 (長母音5と短母音7) のダイアグラム
(from Centre for English Language Teaching Stirling University)

5.4. 短母音・長母音

母音の実際の音長が長いか短いかは、母音直後の子音の声帯振動の有無や文中で強勢が置かれるかどうかと大きな関係がある。すなわち、*bed/ bet* や *rider/ writer* のミニマル・ペアの場合、有声子音 /d/ の直前の /e/ はむしろ /e:/ に近く、/aɪ/ はむしろ /a:ɪ/ に近い。実際、破裂子音が文末に来る場合などでは、不破裂音になるため有声・無声子音を判断する聴覚的な決め手は直前の母音の長さということになる。ストレスが置かれる音節中の母音と置かれない音節中の母音の音長についても同様の母音の引き伸ばし現象が起こっていると言うことができる。

5.5. 円唇 / 平唇と舌の高さ

英語の母音について日本人英語学習者に説明する場合、1) 舌の位置、

2) 円唇・平唇の区別、3) 開口度の3点から特定し、モデル音を聞かせる場合は、かなり誇張して示すことが効果的であるとされている。英語の平唇母音は/i:, ɪ, eɪ, e/で、円唇母音には/ɔ:, ɒ, u:, ʊ, ɔɪ, əʊ, ʊə/などがある。その他の母音については唇は中立(休めの位置)とする。舌の位置から説明する場合、前母音としては、/i:, ɪ, e, æ/、後母音には、/u:, ʊ, ɔ:, ɒ, ɑ:/などがある。いずれにしても、日本語の母音と比べて、どのような変化を加えれば英語らしい母音になるかというヒントを与えることから始めることで初級学習者はより実感をつかみやすくなる。

5.6. あいまい母音シュワー

英語において最も頻繁に使われる母音が、ストレスが置かれない弱音のあいまい母音/ə/ (schwa)である。日本人英語初級学習者は、この強弱音節の弱音/ə/ができないために、ストレスリズムに乗って発音できない場合が多い。したがって、/ə/音は、最終段階で単独で識別させて終わるのではなく、早い時期から導入し、もっと大きなスピーチ単位の中で、ストレスやリズムと関連づけながら練習させるべきである。

5.7. 日本人学習者にとっての問題音(困難音・混乱音)と練習教材

教師はここで提案する教材を学習者の習熟度に合わせて選択した上で導入する必要がある。理想的には、学習者にとって既習の語彙や文法の中で練習させたいので、個別の状況に合わせてサンプルの語や文を追加したい。表には、問題音(Problem sounds)、キーワード(Key words)、発音の仕方と日本語音との比較(How to make the sounds.)、ミニマル・ペア/例文(Word pairs/sentences)が左から順に示してある。

P.S.	Keywords	How to make the sounds	Word pairs / Sentences (Baker, 1977)
/l/	letter, lake, lamb, lion	歯茎に付けた舌先の両側から呼吸を出す。舌先は次の母音が始まるまで離さないのがコツ。	1. long-wrong 2. light-right 3. fly-fry 4. glass-grass
↓			
/r/	rain, read, rose, rice	舌先を上曲げ、口蓋のどこにも付けないのがコツ。舌の両側は奥歯と接触させるくらいの開口度。	1. Do you mean the long one? 2. No, that's the wrong one. 3. The one on the right with the blue.
/f/	face, fine, coffee, laugh	上歯と下唇を接触させ、その隙間から呼吸を摩擦させながら出す。摩擦音の高ピッチノイズ音が聞こえるまで接触を離さないのがコツ。	1. fat-hat 2. feel-heel 3. feet-heat 4. fall-hall
↓			
/h/	hot, hear, high, hope	大量の呼吸を急激に声門部分を通すことにより摩擦音を作る。舌は口蓋のどこにも付けない。寒い時、手を温めるときに喉の奥から出す時の勢いのある呼吸と同じ要領。	1. If you feel ill, you shouldn't climb that high hill. 2. He was holding a folded newspaper in his hand.
/v/	van, vase, love, five	上記 /f/ の要領で、声帯振動させるのが /v/。	1. vest-best 2. van-ban 3. vote-boat 4. vet-bet
↓			
/b/	back, big, about, club	日本語の 'b' に似ているが、破裂時に唇の緊張度がより大きく、呼吸の流出速度も速い。	1. I'm wearing my best vest today. 2. I bet he is a bet.
/θ/	thin, three, nothing, birthday	舌先を上下歯の間に置き、その隙間から呼吸を摩擦させ出す。摩擦音の高ピッチノイズ音が聞こえるまで接触を離さないのがコツ。	1. think-sink 2. thick-sick 3. mouth-mouse 4. path-pass
↓			
/s/	sun, sky, just, yes	日本語の 's' に似ているが、上歯茎に付けた舌先の隙間から、より長い摩擦を発生させ呼吸の流出速度も速い。	1. I think that boat is sinking. 2. It's a great thing to be able to sing so well.
/θ/	that, their, father, mother	上記 /θ/ の要領で、声帯振動させるのが /ð/。	1. then-Zen 2. they-day 3. breathe-breeze 4. there-dare
↓			
/z/	Zoo, rose,	英語の /z/ は、日本語の 'z' と同じ要領。	They were there all day.
/d/	dog, sad	英語の /d/ は、日本語の 'd' と同じ要領。	Don't you dare go there!
/ŋ/	ring, song, morning,	英語の /ŋ/ は、日本語の 'ン' や 'ガ行' の直前に来る 'ン' と同じ要領。	1. wing-win 2. thing-thin 3. sing-sin 4. rang-ran
↓	angry		

/n/	rain, read, rose, rice	英語の/n/ は、日本語の「あんない」の「ん」の要領で、歯茎音/t, d, s, z, l, n/直前で起る鼻音。	1. He ran to the door and rang the bell. 2. You can't win a flying race with one wing.
/z/	television, usual, measure	まず、/s/ の舌の位置から、口蓋に沿って少し奥にずらしてつくる摩擦音。英語の/z/は、日本語の「かじ」の「じ」/z/より舌の位置が少し奥で調音される。	1. measure-manager 2. treasure-danger 3. garage-large 4. pleasure-soldier
/dʒ/	jam, July, judge, large	破裂音/d/と摩擦音/z/の連結したのが破裂音/dʒ/。英語の/dʒ/は日本語の「じかん」の「じ」/dʒ/より、舌の位置が少し奥で調音される。	1. It's a pleasure to work for such a good manager. 2. A soldier usually does not have much leisure time.
/ŋ/	garden, button, mountain	英語の/t/や/d/の直後に/n/が続く場合、鼻腔破裂(nasal plosion)が起こる。まず、/t/ の舌の位置でそのまま舌を動かさず、破裂した呼吸を口腔から出す代わりに鼻腔から勢い良く出す。	1. In the garden we have wooden chairs. 2. Certainly, I will share your burden. 3. What a pretty golden button!
/l/	middle, little, needle, hospital	英語の/t/や/d/の直後に/l/が続く場合、側面破裂(lateral plosion)が起こる。まず、/t/の舌の位置でそのまま舌を動かさず、破裂した呼吸を舌の両側から勢い良く出す。/t/から/l/への間、舌の位置を上る歯茎から離さないのがコツ。	1. There's a little metal kettle on the table. 2. In hospital they use a lot of needles. 3. That'll settle this problem.
/t/	ball, feel, apple, milk, beautiful	舌尖を上る歯茎にしつつかりつけながら、舌の後部を軟口蓋の方向に引っ張り、/u/の音色を出す。暗いV (dark /l/)は、子音直前や語末の位置で起こる。	1. What a beautiful girl! 2. What a tall gentleman! 3. My uncle is in a small comfortable hospital.
/d/	cried, cleared	英語の過去形を示す接尾辞-ed の3種類の音変化。有声音の直後では/d/、無声音の直後では/t/、そして、/d/と/t/の直後では/rd/。	1. He painted while I waited. 2. I cleared the table and filled the glasses.
/t/	looked, pushed		
/rd/	painted, waited		
/z/	dogs, chairs	英語の複数形-s や三人称単数現在形の接尾辞-s, -esを示す3種類の音変化。有声音の直後では/z/、無声音の直後では/s/、そして、/s, z, ʃ, tʃ, dʒ/の直後では /ɪz/。	1. It was raining cats and dogs. 2. I like apples and peaches after meals. 3. I watched the comedy and laughed a lot.
/s/	books, lips		

/ɪz/	dishes, boxes		
/ɑ:/ ↓	car, heart, arm, guitar	舌の位置は、後・低。唇の緊張はない。	1. heart-hurt 2. hard-heard 3. warm-worm 4. walk-work 5. short-shirt 6. far-four-fur 7. farm-form-firm
/o:/	ball, sport, always, water	「おおさか」の「オー」の要領であるが、舌の位置は、もう少し奥で、唇は丸めないが前に突き出す。	
/ɜ:/	girl, bird, world, Thursday	/o:/から舌を少し前に押し上げ、この中立の位置から唇を丸めないでまったく緊張させず、開口度を最小にする。(米音では、巻き舌にして口の奥からのこもった音色)	1. The more you work, the more you earn. 2. That page is torn. Turn it over. 3. You'll hurt your heart, if you smoke too much.
/ə/	again, ago,	/ɜ:/は長母音であるが/ə/は非常に短い母音。あいまい母音(シュワワー)で短く、弱化した音が特徴。ストレスが置かれない音節に現れ、機能語に頻繁に現れる。	1. a glass of water 2. black and white 3. <u>but</u> why not? 4. one <u>of</u> them 5. go <u>to</u> bed 6. <u>for</u> example
/e/	pen, end, any, help	英語の /e/ は、日本語の「エ」の要領であるが、開口度は /ɪ/ より大きく、「笑顔の表情」の母音。	1. pen-pan 2. said-sad 3. beg-bag 4. men-man 5. cap-cup 6. cat-cut 7. mad-mud 8. ran-run
/æ/	man, hand, black, apple	/e/の舌の位置で唇を思いっきり横に開く。/æ/は、/e/と/ʌ/の間の短母音。	1. "How sad", said Ann to the man. 2. Cut up some ham for the cat. 3. My mother got mad when she saw the mud.
/ʌ/	cup, love, must, lunch	/æ/の舌の位置から少しだけ奥にずらす短母音。「上を向いて驚いたとき」のような「アッ」の要領。	
/u:/ ↓	food, school, soup, shoes	英語の /u:/ は、日本語の「ふうせん」の「ウー」の要領であるが、唇を思いっきり丸めて後・上から出す長母音。	1. pool-pull 2. fool-full 3. boot-foot 4. suit-soot 5. Luke-look 6. goose-good
/u/	book, cook, put, woman	/u:/の短母音版が/u/。	1. The fool fell in the full pool. 2. Look! There's some soot on your suit. 3. Take good care of the ill goose.
/i:/ ↓	see, tea, easy, evening	英語の /i:/ は、日本語の「いいん」の「イ」の要領であるが、開口度が小さく、思いっきり唇を横に開く長母音。	1. sheep-ship 2. eat-it 3. seat-sit 4. peel-pill 5. bean-bin 6. leek-lick

/ɪ/	ship, ink, milk	/ɪ:/ より開口度は少し大きく, /e/に近い音色になる短母音。	1. Please sit on this seat. 2. Don't eat it. It's been in the bin. 3. Don't lick the leek or you'll feel ill.
/eʊ/ ↓ /o:/	no, go, over, don't, phone ball, sport, always, water	日本語の「オー」と間違われやすいが、顎が上下に動く2重母音。(米語では/ou/であるが、英音では/eʊ/) 上記/o:/参照。	1. bowl-ball 2. boat-bought 3. coat-caught 4. bone-born 5. Coke-cork 6. woke-walk 1. He caught his coat in door. 2. He bought a boat. 3. He woke me to go for a walk. 4. I saw her sewing.
/eɪ/ ↓	April, May, gate, railway	/e/から/ɛɪ/に移る2重母音。/ɪ/の方が短く/e/に添えられる要領。日本語の「エー」と混乱しないように。	1. pain-pen 2. tail-tell 3. wait-wet 4. taste-test 5. paper-pepper 6. later-letter
/e/ /e:/	上記/e/を参照。	上記/e/を参照。	1. Please post the letter later. 2. The rain in Spain mainly stays on the plain. 3. Wrap the pepper in the paper.

・連続子音

連続子音とは、子音が2つ以上重なる場合である。日本語の音節は、基本的にC・V（子音・母音）の開音節構造をなすが、英語の場合、C・V・C（子音・母音・子音）の閉音節構造であり、C・C・V・C（子音・子音・母音・子音）のように母音の前後に複数の子音が来ることもある。そのために、日本人の英語学習者は、英語の音節構造を日本語の音節構造で代用する傾向を示すことになる。すなわち、以下の例に見られるように、子音の直後に母音が存在しない場合、余分な母音を挿入することによりC・V・CはC・V・C・Vに、C・C・V・Cは、C・V・C・V・C・Vとして発音するようになる：

street /stri:t/（1音節）→ /sutori:to/（4音節、5拍）

stop /stop/（1音節）→ /suto?pu/（3音節、4拍）

このように、余分な母音を挿入することにより、本来の英語の音節数が何倍にも膨れ上がることになり、延いては英語のストレスリズムにうまく乗れない結果になる。このような状況を防止するために、以下のように、英語の音節を音素レベルまで分解し、それぞれの子音の直後に母音が入り込まないように練習してから、再度徐々にリズムを壊すことなくもとの音節に組み立てなおす方法をとる：

/stri:t/ → /st/ + /ri:/ + /t/ → /stri:t/

/stop/ → /st/ + /ɒp/ → /stop/

また、以下の例のように、/l, r/の混乱音の組み合わせさせた語中で、日本人学習者が子音の順序を入れ替えて発音する場合、同様の分解テクニッ

クで解決することができる：

(順序入れ替え)

railroad /'reɪləʊd/ → /'reɪləʊd/

already /ɔ:l'reɪ/ → /ɔ:r'leɪ/

(音節分解→組み立て直し)

/reɪləʊd/ → /reɪ/ + /ləʊd/ → /reɪləʊd/

/ɔ:r'leɪ/ → /ɔ:l/ + /reɪ/ → /ɔ:l'reɪ/

6.1. 連続音声の中の同化現象

同化現象は連続音声中で、1つの音から次の音につながって発音される場合起こる現象で、スムーズな調音器官の協調作用の結果現れる。英語音声指導において自然な英語の音声に近づくためには(また、合成音生成の分野では機械音が人間の自然な音声に近づくためには)、この同時調音(co-articulation)と呼ばれる現象を理解し、実践しなければならない。抽象的な存在として位置付けられている音韻レベルでの音素は、現実の音声のレベルでは環境によって変化を起こし、決して同一音として実現されることはないからである。

英語学習の初期に、この連続音声中に起こる代表的な音声変化を導入することによって、単に正確なセグメンタル特徴の習得だけではなく、リスニング・スピーキングに関わるすべての土台となる英語らしいリズムを習得させることができる。

例えば、普通のスピーチのスピードでは、無声・有声歯茎破裂音/t・d/、有声歯茎鼻音/n/、無声・有声歯茎摩擦音/s・z/は、Fig. 6の左側のような環境下の場合、それぞれ右側のように変化しやすい。ただし、このような変化は、中学校・高等学校の教科書に付いている音声CDなどのお手本のモデル・リーディングの読み方の中では、必ずしも100%の確率で起

こるものではないということを認識しておかなければならない。また、無声・有声歯茎破裂音/t・d/の場合、さらに変化した末、声門閉鎖音/?/になり単に一拍分の無音になることが多い。

変化前		変化後
/t-p, t-b, t-m, t-k, t-g/	→	/p-p, p-b, p-m, k-k, k-g/
/d-p, d-b, d-m, d-k, d-g/	→	/b-p, b-b, b-m, g-k, g-g/
/n-p, n-b, n-m, n-k, n-g/	→	/m-p, m-b, m-m, ŋ-k, ŋ-g/
/s-ʃ, s-ʒ, s-j/	→	/ʃ-ʃ, ʃ-ʒ, ʃ-(j)/
/z-j, z-ʒ, z-j/	→	/ʒ-j, ʒ-ʒ, ʒ-(j)/
/t-j/	→	/t-ʃ/
/d-j/	→	/d-ʒ/

Fig. 6. 英語における代表的な音声同化の種類

同化の代表的なもう一つの現象は、有声子音の直後に無声子音が来る場合、前の有声子音の有声性が失われた結果、無声子音に変化することである。スピーチの中では日本語においても、「きつつき」や「すすき」のような語の中では、無声子音に挟まれた高母音は頻繁に無声化する。日本語においても、そして特に英語においても、自然な発話速度の中でこのような音声の同化現象を敢えて起こさないで1語1語を忠実に独立させて発音することは、各言語のリズムにスムーズに乗ることができない結果を招く。

6.2. 消失（脱落）

同化現象同様、消失（脱落）もスムーズな英語でのスピーチを容易にさせてくれる現象である。（音声学的には、同一語中で音が消える現象を消失と呼び、2語以上が影響することによって音が消える現象を脱落と呼んでいる。）頻繁に消失する子音は、/t/と/d/の歯茎破裂音が/-st, -ft, -nd, -md/のような環境で、次に破裂、鼻音、摩擦の子音が来るときに消失す

ることが多い。特に、前後を破裂子音で挟まれる場合は、一拍の声門閉鎖 /p/ が起こりやすい。つまり、一拍の空白のポーズを聞いて、ネイティブの英語話者は、そこに破裂音がもともと存在していたことを直感するのである。母音では、シュワー /ə/ で代表されるあいまい母音が、第 1 強勢の音節より後にあり、前に子音が後ろに /r/ がある場合、さらに後ろに /l/ がある位置で消失しやすい。また、ストレスが置かれた音節より前にある母音では、ストレス音節が /l/ や /r/ で始まっている場合、消失しやすい (今井 1989)。

・聴き取り訓練

ここでは、4 種類の代表的な聴き取り訓練の練習例を示し、困難音素の識別教材として提案する。

7.1. 音当て

学習者は、一連の語の中に含まれるターゲットの音素を見つけ出すのがこの練習の目的である。この練習は、語彙数が限定されている初級学習者やミニマル・ペアが見つけにくいときに最適な識別練習である。以下は、日本人にとって混乱音である /θ/ と /s/ の識別を練習する手順の例である：

Instructor: I'm going to say a list of words. Listen for words with /θ/. "Thin, thin". Is there /t/ in this word?

Learner: Yes. There is /θ/ in "thin".

Instructor: That's right. Next, "sin, sin". Is there /θ/ in "sin"?

Learner: No. There isn't /θ/ in "sin".

Instructor: That's right. Next, "math, math". Is there /θ/ in

“math”?

Learner: Yes. There is /θ/ in “math”.

Instructor: That's right, again. There was /θ/ at the end, etc.

7.2. 二語択一 (Lee 1976)

学習者は、与えられた 2 つの語に含まれる音素を識別し、その 2 語が同音を持つ同じ語であるか違う語であるかを識別し当てることが目的である。教師は、識別練習に入る前に、学習者が語の意味と、ターゲット音素の特徴を知っていることを確認しなければならない。以下は、日本人にとって異音であり、最大の混乱子音である /l/ と /r/ の識別を練習する手順の例である：

Instructor: Listen to these two sounds, “light, right”. They are different. Again, “light, right”, again “light, right”. Can you hear the difference between them? Now, listen again carefully. I'll say the first word twice “light, light”, now I'll say the second word twice “right, right”. Now listen to these words “light, right”. Are they the same or different? Again, “light, right”.

Learner: Different.

Instructor: Yes, that's right. Next, “light, light”, “light, light”.

Learner: The same.

Instructor: Yes. Good! Next, “right, right”, “right, right”, etc.

7.3. 三語択一

学習者は、与えられた 3 つの語に含まれる音素を識別し、他の 2 語と異なる 1 語を識別し当てることが目的である。以下は、日本人にとって

異音であり、混乱を起こす短母音である /θ/ と /s/ の識別を練習する手順の例である：

Instructor: I'm going to say three words. Two of them are the same and the other one is different from the rest. I want you to choose the different one. Are you ready? “cat, cut, cut”, again “cat, cut, cut”. Can you hear the difference between them? The first one is different from the rest. Now, listen again very carefully. I'll say the first word twice “cat, cat”, now I'll say the second and third word twice “cut, cut”. Next, listen very carefully, “cat, cut, cut”, again “cat, cut, cut”.

Learner: The first one. The first word is different from the rest.

Instructor: Yes, that's right. Only the first one is “cat”, the others are “cut”, etc.

7.4. 2 文択一

この練習は、語のレベルではなく文のレベルで音の識別をさせ道理に適っている文を選ぶのが目的である。以下は、日本人にとって異音であり、混乱を起こす長母音である /ɔ:/ と /ə:/ の識別を練習する手順の例である：

Instructor: I'm going to say two sentences that sound similar but only one of them makes sense. I want you to choose the sensible one. The first sentence is: “I walk eight hours a day”, again “I walk eight hours a day”. The second sentence is: “I work eight hours a day”, again “I work eight hours a day”. Now, which sentence makes sense?

Learner: The second one.

Instructor: Yes, that's right. The second sentence is sensible, because of "work", "I work eight hours a day" but the first sentence says "walk", "I walk eight hours a day" which would certainly be very tiring for me. "Walk", and "work" are different, etc.

(上記のやり取りの中では、便宜上、学習者は1度目で正解するが、実際には練習目的や語の意味を説明する際に、繰り返しやパラフレーズが必要になってくるはずである。)

日本人学習者にとっての英語の困難音や混乱音を中心に上記のような識別練習を通じて、学習者が比較的正確に英語の音素を聴き取ることができるようになった時点で、音を発音する段階に入る。初級学習者の特徴として限定された語彙による制限が加えられるため、文字ではなくピクチャー・カードで意味と音とを直接結びつける方法をとる。学習者にとって、意味のない練習ほど退屈なことはない。発音練習を長く興味を持続させるためにも教師の工夫は欠かせない。

・超文節特徴 (Non-segmental Features)

8.1. 文イントネーション

英語では、プロソディ特徴は共通してピッチ変化が最大の聴覚的ヒントとなっている。従って、実際には、語のストレスとイントネーションを切り離して別々に発音することはできないし、これらをリズムと切り離すこともできない。例えてみれば、オーケストラのように個別の母音・子音という楽器演奏者がリズムという指揮者の伴奏に合わせて発話というハーモニーを作るのである。

日本人学習者の特徴は、文頭から文末までモノトーンで通すイントネーションで発話することである。英語のネイティブ話者は、一般的に平叙文やWh疑問文には下降調を用い、Yes-No疑問文、羅列文、選択文は上昇調を用いる。また、上昇調は安心させる感情を出す役目も果たす。

イントネーション曲線の表示法として、一般的には視覚的に分かりやすいように等高線に似た図式で示したり、大小のドットを強弱ストレスシラブルの上に付けたりして表示する方法がある。さらに、それらドットを上下にずらし矢印を追加することによって、強弱ストレスと高低ピッチの両方を合わせて示すこともできる。

8.2. 文中のストレス

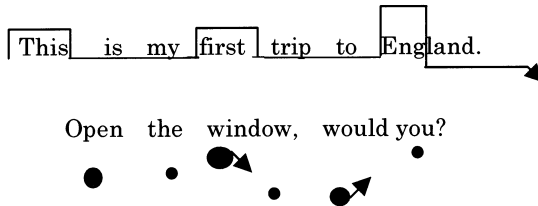


Fig. 7. ストレス・イントネーション曲線表記の例

基本的なイントネーションパターン以外に、文の中でどの語がストレスを受けるかを知る必要がある。これは、英語ではストレスリズムの強弱音の基礎となるので初期の段階から導入すべき項目の1つである。

普通、文章レベルでは情報量が多い内容語と呼ばれる名詞、動詞、副詞、形容詞、疑問詞などにストレスが置かれる。また、内容語の中でも、文末に来る内容語に最大のピッチ変化（音調核）が置かれることが多い。逆に、主に文を組み立てる役目に貢献するような機能語と呼ばれる、冠詞、前置詞、助動詞、接続詞、代名詞などにはストレスが置かれない。従って、中立的な状況においては、以下のようなストレスの位置が最も一般的である：

I am from Japan. /aɪ əm frəm dʒə'pæn/ (自然な位置)

I am from Japan. /aɪ 'æm 'frəm dʒə'pæn/ (不自然な位置)

簡便な方法として、符号を用いて音調核（第 1 文強勢）にあたる音節の左肩あるいは左下につけて、音調の変更開始点を示す方法がよく用いられる。この場合、第 2 文強勢のかかる音節の左肩に「'」、左下に「_」を付して、それぞれの音調の高低を示す方法が併用されている。

ただし、普段ストレスを受けない機能語がストレスを受けるようになる状況では、その機能語に特別な比較対照や強調の意味が込められる。次のような文章では、その音調核の位置の可能性は、その込められた特別な意味によって違う。

1. /'aɪd |laɪk səm |kɒfɪ |naʊ/ (i.e. I'm speaking only of my own wishes.)
2. /aɪd |laɪk səm 'kɒfɪ |naʊ/ (i.e. not some other kind of drink)
3. /aɪd |laɪk səm |kɒfɪ 'naʊ/ (i.e. not later, but now)
4. /'aɪd 'laɪk|sə'm|kɒfɪ 'naʊ/ (i.e. I'm getting annoyed.)

英語では、文の音調核にあたる情報の中心部分は原則的に 1 ケ所であるため、学習者はできるだけその部分を目立たせるようにし、逆に他の部分を控えめにさせ、メリハリを付けながら発音することを身につける練習をすることが望まれる。

8.3. 文のリズム

イントネーションやストレスパターン同様、英語のリズムは日本語のリズムとは異なる。日本語のリズムはスタッカートリズムで、すべての音節が同じ強さとタイミングで発音されるが、英語のリズムは典型的なストレスリズムであり、ストレスの置かれる音節から次のストレスのあ

る音節までの等時性が保たれる。したがって、英語では途中に来る弱音節は速くあいまいに発音されるのでシュワー /ə/ が多用されることになる。

日本人の英語学習者の場合、スタッカートリズムで英語を発話するために、セグメンタル特徴が正しかったとしても、卓立する部分がないために全体的に聴き取りにくい英語となる。このような日本語独特のリズムから脱出するためには、英文の中で機能語や旧情報などの比較的重要でない語をあいまいな母音（ /ə/ や /ɪ/ ）で、1語1語区切りながら発音するのではなく、一塊にする気持ちで速く発音する練習をする必要がある。こうすることによって、ストレスを受けた長く高いピッチの音節が卓立して英語らしいリズムに近づくようになる。

英文を繰り返し注意深く聴かせ、ストレスのある音節の拍の間隔を手拍子でとらせ、最後に英語らしいストレスリズムとイントネーションで発音するようにさせる。拍の間隔を視覚的に見せるために、良く用いられるのが、次の例文の下にあるような大小のドットである。

1. What's that?



2. Yes, I have.



3. He's watching a film.



4. What's he watching?



5. It's Harry Potter and the Chamber of Secrets.



このように、英語の音声指導は、個別のセグメンタル特徴から始まり、連続音声の音声変化を経て、最終的に文章の中でストレスリズムと適切なイントネーションに結びつくような段階的指導をすることにより、す

すべての部分が密接に関連してくる。

・ゲームとソング (Games and Songs)

9.1. ゲームの中でイントネーションを理解させる

英語におけるイントネーションの大切さについて、ゲームを通じて楽しみながら習得させる。たとえば、まず日・英共通の感嘆詞などを使って、イントネーションのバリエーションとそれに伴う感情表現を実感させることから始める。たとえば、「んー」Mmmには、次のようなバリエーションがあるので、実際のコンテキストの中に入れて練習してみる。

1. ´Mmm 上昇調であれば、“What did you say?”
2. `Mmm 下降調であれば、“Yes”
3. ^Mmm 上昇下降調であれば、“How nice!”

A: Would you like some homemade cakes?

B: ´Mmm?

A: Would you like some cakes?

B: `Mmm.

A: How's the taste?

B: (eating) ^Mmm!

以上のイントネーションに関しての基礎知識をもとにして、さらに次のようなゲームや練習を通じてイントネーションとそれに伴う感情表現の習得を提案したい。これらは、年少者向けのクラスでは、特に効果があることを著者の経験から付記したい。

9.2. 二十のとびら (Twenty Questions)

この昔からあるゲームは、*Animal, Mineral or Vegetable?*とも呼ばれているが、何の事前準備もなく、いつでもどこでも手軽に楽しめるゲームである。実際の教室では、学習者の触覚にうったえかけるために教師は袋の中に何種類かの物を隠しておく。まず、クラス（グループ、ペア）の一人が代表として前に出てきてその隠されたなぞの物体を手だけで探って、その情報を他のクラス（グループ、ペア）の構成員に伝える。ゲームの目的は、この手探りだけからの情報しかもたない代表者に対して許可されている20回までの質問をして、その謎の物体を早く当てた者（グループ、ペア）が勝ちとなる。原則としてYes-No疑問文を使用させるが、短時間で正解を出させたい場合には、Wh疑問文も許可する。質問者であっても回答者であっても様々なイントネーション・パターンが練習できる：

- a) 上昇調 ‘´’ Yes-No疑問文、付加疑問文の場合は疑問を表す
- b) 下降調 ‘`’ 平叙文、WH疑問文、付加疑問文の場合は念押しを表す
- c) 上昇下降調 ‘^’ 選択疑問文、羅列文を表す
- d) 下降上昇調 ‘~’ 対比対照文、発話の継続性を表す

Q: Is it ´animal, ´mineral or `vegetable?    A: It's `vegetable.

Q: Is it ´square or `round? A: It's ~round but not completely round.

Q: Is it ´heavy or `light?    A: It's `light but heavier than an `egg.

Q: Have ´I got one? A: No, you `haven't.

Q: Has our ´teacher got one? A: No, `he hasn't, `either.

Q: Who `usually has got it?	A: A `green-grocer has.
Q: So, it's `edible, `isn't it?	A: `Yes, it's de `licious.
Q: What `colour is it?	A: `Usually, they are ´red or `green.
Q: How do you `eat it?	A: You can eat it as it `is.
Q: `When do you usually eat it?	A: `Any time, often after `meals.
Q: Where does it `grow?	A: It grows on a `tree.
Q: It's an `apple, ´isn't it?	A: `Yes, that's ´right, etc.

9.3. 問い返しとリンクグ-r (Linking 'r')

問い返しに伴う高上昇調は、日本語でも頻繁に使用するので比較的理
解しやすいはずである。同時に、綴りに「r」が含まれて次に母音が続く場
合、この歯茎接近音（英国式発音ではもともとアメリカ式発音のように
接近音[r]は含まない）を日本語のラ行音である弾き音[ɾ]に変化する。

実感のある（意味のある）練習にするためには時には実際にカードや実物をテーブルや椅子の上や下や横において置くことによって、単なる架空の練習でない工夫をすることができる。下降・上昇イントネーションとリンキング-_rを両方を正確に発音させるためには、教師はその両方に注意を払わなければならない。

Q: 'Geroge, where is the `paper?

A: The `paper? Here on the `television.

Q: 'Ken, where_ is my umb `rella?

A: Your_ umb`rella? Here\_ on the `table.

Q: 'Ken, where_ are my `eye-glasses?

A: Your_ `eye-glasses? They are\_ over there\_ on the `desk.

9.4. 歌とライム

歌やナーサリーライムを英語音声教育に利用することの利点は、数多い。まず、セグメンタル特徴は言うに及ばないが、特に、英語の強弱ストレスリズム、イントネーション、プロミネンスなどのスプラ・セグメンタル特徴学習のための教材部分が豊富に現れる。初級学習者であっても、うまく導入されれば、その意図する効果の定着率が大きく、何よりも楽しみながら音声特徴を身につけていけるのが最大の利点であると言える。

次の４つのソングやライムは、紙面の制約上数多いレパートリーの中からサンプルとして著者が選択したものである。当然、このような教材の選択時に注意しなければならないのは、学習者にとっての語彙や文法の難易度であるが、これらの点にあまり神経質になるよりは、教師の嗜好で選択することも必要である。それぞれのソングやライムには、１）困難子音 ２）困難母音 ３）音声変化 ４）弱化 ５）リズムパターン ６）文の種類などの指導用手引きを付けた。また、教師用指導用に音声記号をイタリック体で示したが、拍子の開始点がどこにあるか、音の変化や弱화가どこで起こっているかなどを確認したうえで、まずは文字を見せずに音だけで導入することを試みたい。

9.4.1. This is the Way we Wash our Face

Examples (Dakin, 1975, Mortimer 1976)

1) /l, t, θ, ð, r, w, ŋ/

2) /eɪ, aʊə, ɪz/

3) /n→ŋ, s→ð, t→ʔ, k→ʔ, p→ʔ/, 母音リンキング

4) is /ɪz/, the /ðə/, at /ət/, to /tə/

5) 4 拍子

6) 日常活動をジェスチャーで歌える平叙文の繰り返し

● ● ● ●	● ● ●	● ●	● ●
This is the 'ðɪs_ɪðə	Way we 'weɪ wɪ	Wash our 'wɒʃ_ɑ:	Face 'feɪs
Wash our 'wɒʃ_ɑ:	Face 'feɪs	Wash our 'wɒʃ_ɑ:	Face 'feɪs
This is the 'ðɪs_ɪðə	Way we 'weɪ wɪ	Wash our 'wɒʃ_ɑ:	Face 'feɪs
at Seven o ə? 'sevne_	Clock in the 'klɒk_ɪn ðə	Mor- 'mɔ:_	Ning nɪŋ
(Repetition of the above)			
		Clean our 'kli:n_ɑ:	Teeth 'ti:s
		Eat our 'i:t_ɑ:	Breakfast 'breɪfəst
		Wash the 'wɒʃ ðə	Dishes 'dɪʃɪz
		Sweep the 'swi:ʔ ðə	Floor 'flo:
		Drink our 'drɪŋk_ɑ:	Milk 'mɪlk
		Cook our 'kʊk_ɑ:	Dinner 'dɪne
		Go to 'geʊ tə	Bed 'bed

9.4.2. Ten Green Bottles (song)

- 1) /t̚, r, w, f, ɪ, n/
- 2) /æ, ɔ:, i:, ʌ/
- 3) /n→ŋ, n→m, z→s, n→n/, 母音リンキング
- 4) and /ənd/, the /ðə/, on /ən/, there'd /ðəd/
- 5) 4 拍子
- 6) 仮定文の繰り返し

● ● ● ● ● ● ● ● ● ●					
	Ten green	Bottles	Standing on the	Wall	
	'teŋɡri:m	'bɒt̚ɪ	'stændɪŋ_ən_ðə	'wɔ:l	
	Ten green	Bottles	Standing on the	Wall	
	'teŋɡri:m	'bɒt̚ɪ	'stændɪŋ_ən_ðə	'wɔ:l	
and if	One green	Bottle should	accidentally	Fall	
end_ɪf	'wʌŋɡri:m	'bɒt̚ɪ_ʃʊd_ækse	'detlɪ	'fɔ:l	
there'd be	Nine green	Bottles	Standing on the	Wall	
ðə?bɪ	'naɪŋɡri:m	'bɒt̚ɪ	'stændɪŋ_ən_ðə	'wɔ:l	

(Repetition of the above with reduction of the number)

9.4.3. Baa Baa Black Sheep (song)

- 1) /l, t̚, z, θ, v, w/
- 2) /ɑ:, i:, u:, eɪ, æ, ə/
- 3) /ss→s, z→s, n→ŋ, k→ʔ, n→n/
- 4) for /fə/, and /ənd/, the /ðə/
- 5) 2 拍子
- 6) 対話型Yes-No疑問文

●	●	●	●	●	●
	Baa baa		Black Sheep		
	'bɑ: bɑ:		'blæʃ i:p		
	Have you any		Wool		
	'hæv ju enɪ		'wʊl		
	Yes, sir		Yes, sir		
	'jesɜ:		'jesɜ:		
	Three bags		Full		
	'θri: bægs		'fʊl		
	One for the		Master		
	'wʌŋ fə ðə		'mɑ:stə		
	One for the		Dame		
	'wʌŋ fə ðə		'deɪm		
and	One for the		Little Boy		
ən	'wʌŋ fə ðə		'lɪtɪ bɔɪ		
who	Lives down the		Lane		
hʊ	'lɪvz daʊn ðə		'leɪn		

9.4.4. Dinner's Ready (rhyme)

1) /l, t, r, w, ts/

2) /i:, ɪ, eɪ, u, e, ʌ/

3) /n→ŋ, tʃ→tʃ/, 母音リンキング

4) for /fə/, and /ən/, you /ju/, it /ɪt/

5) 2 拍子、4 拍子

6) 対話型Yes-No疑問文、Wh疑問文、問い返し疑問文

	● ●	● ●	● ●	● ●
A:	Dinner's 'dɪneɪz	Ready 'redi	Come and 'kʌm əŋ	Get it! 'get ɪt
B:	What's for 'wɒts fə	Dinner? 'dɪnə		
A:	Something 'sʌmθɪŋ	Special! 'speʃl		
B:	Something 'sʌmθɪŋ	Special? 'speʃl		
A:	Chicken 'tʃɪkɪŋ	Curry 'kʌrɪ	Don't you 'dəʊntʃu	Like it? 'laɪk ɪt
B:	Yes, I 'jes aɪ	Love it 'lʌv ɪt	What's for 'wɒts fə	Pudding? 'puɪdɪŋ
A:	Wait and 'weɪt ən	See 'si:		

．まとめ

発音練習教材として、テープ、CDビデオなどを聴いたり見たりすることによって発音向上は望める。無論、ネイティブ英語話者との生のコミュニケーションの中で習得していくことが理想的であるが、残念ながら日本ではまだまだこのような機会は少ない。

ここで提案した方法と教材を利用することによって、日本人の英語学習者が無理なく興味をもって自然な英語コミュニケーション能力習得のための練習を持続できるもの考える。

おわりに

立命館大学では、2003年度に独立研究科修士前期課程として言語情報

研究科を発足させ、英語教育と日本語教育の専門家としての高度職業人教員養成を行ってきた。教育経験を持たないが未来に大きな夢と希望を抱いている若い学部からの多数の進学者以外に、中学校や高校の現職教員が自らの英語運用能力向上と同時に言語教育の最新理論・テクニックを身につけるリカレント教育として入学してくるケースも毎年多く見られる。専門を音声学・言語学としてきた著者にとって、教学的にこれほど恵まれた研究指導環境はない。これからも英語教育・日本語教育のプロを目指している院生のために全力を尽くし続ける所存である。

最後に、大先輩であり同僚でもある法学部山本岩夫先生が定年退職を迎えられるにあたって、著者にとって、いわば、研究の原点でもある音声学と英語音声指導に関するテーマについて考察できるすばらしい機会をここに与えていただいたことを心より感謝したい。

References

- Baker, Ann. (1977) *Ship or Sheep? Introducing English Pronunciation*, London: C.U.P.
- Blunden, Edmund (1940) *Poems 1930-1940*. London: Macmillan.
- Hardcastle, W.J. (1976) *Physiology of Speech Production*, London: Academic Press.
- 今井邦彦 (1989) 「新しい発想による英語発音指導」、大修館書店。
- Lee, W.R. (1976) *Language Teaching Games and Contests*, Tenth impression, London: OUP.
- Lenneberg, Eric. (1967) *The Biological Foundations of Language*. New York: John Wiley & Sons.
- Lisker, L. and Abramson, A. (1964) A cross-language study of voicing in initial stops: Acoustic measurements, *Word*, 20.
- Lisker, L. and A. S. Abramson (1970) The voicing dimension: some experiments in comparative phonetics. *Proceedings of the Sixth International Congress of Phonetic Sciences, Prague, 1967*.
- O'Connor, J.D. (1980) *Better English Pronunciation*, New Edition, Seibido.

O'Connor, J.D. (1976) *Intonation of Colloquial English*, London: Longman.

小野博 (1994) 「バイリンガルの科学ーどうすればなれるのかー」, ブルーバックス, 講談社.

Pinker, S. (1984) *Language Learnability and Language Development*. Cambridge, MA:

MIT Press.

島岡丘 (2002) 「カタカナで完全マスター英会話」, 丸善株式会社.

島岡丘 (1999) 「カナ表記で通じる英語の発音」, 日本能率協会マネジメントセンター.

Wells, J.C. (2002) *Summer Course in English Phonetics 2002, Exercises on phonetic segments*, University College of London.

Monbushou Courses of Studies:

MEXT (2003) *The Course of Study for Foreign Languages for Lower Secondary Education*. <http://www.mext.go.jp/english/shotou/030301.htm>

Diagram and Chart:

Fig. 1. A Diagram of the Speech Organs: UNIL Linguistique, Lausanne University

<http://www2.unil.ch/ling/english/phonetique/api1-eng.html#Intro>

Fig. 2. A Vowel Chart in RP English: Centre for English Language Teaching Stirling University.

<http://www.celt.stir.ac.uk/staff/HIGDOX/STEPHEN/PHONO/VOWEL/CARDIN.HTM>

Appendix 1. Phonetic Symbols for British English (from Wells 2002)

Consonants

p	<i>pen, copy, happen</i>
b	<i>back, baby, job</i>
t	<i>tea, tight, button</i>
d	<i>day, ladder, odd</i>
k	<i>key, clock, school</i>
g	<i>get, giggle, ghost</i>
tf	<i>church, match, nature</i>
dʒ	<i>judge, age, soldier</i>
f	<i>fat, coffee, rough, photo</i>
v	<i>view, heavy, move</i>
θ	<i>thing, author, path</i>
ð	<i>this, other, smooth</i>
s	<i>soon, cease, sister</i>
z	<i>music, roses, buzz</i>
ʃ	<i>ship, sure, national</i>
ʒ	<i>pleasure, vision</i>
h	<i>hot, whole, ahead</i>
m	<i>more, hammer, sum</i>
n	<i>nice, know, funny, sun</i>
ŋ	<i>ring, anger, thanks, sung</i>
l	<i>light, valley, feel</i>
r	<i>right, wrong, sorry, arrange</i>
j	<i>yet, use, beauty, few</i>
w	<i>wet, one, when, queen</i>

Vowels

ɪ	<i>kit, bid, hymn, minute</i>
e	<i>dress, bed, head, many</i>
æ	<i>trap, bad</i>
ɒ	<i>lot, odd, wash</i>
ʌ	<i>strut, mud, love, blood</i>
ʊ	<i>foot, good, put</i>
i:	<i>fleece, sea, machine</i>
eɪ	<i>face, day, break</i>
aɪ	<i>price, high, try</i>
ɔɪ	<i>choice, boy</i>
u:	<i>goose, two, blue, group</i>
əʊ	<i>goat, show, no</i>
aʊ	<i>mouth, now</i>
ɪə	<i>near, here, weary</i>
eə	<i>square, fair, various</i>
ɑ:	<i>start, father</i>
ɔ:	<i>thought, law, north, war</i>
ʊə	<i>poor, jury, cure (→ɔ:)</i>
ɜ:	<i>nurse, stir, learn, refer</i>
ə	<i><u>a</u>bout, comm<u>o</u>n, stand<u>a</u>rd</i>
i	<i>happy, radi<u>a</u>te, glori<u>o</u>us</i>
u	<i>thank <u>y</u>ou, influ<u>e</u>nce, situat<u>i</u>on</i>
ɪ	<i>sudd<u>e</u>nly, cotton</i>
ɪ	<i>middle, met<u>a</u>l</i>
	stress mark